



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第42号

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
公益財団法人

〒102-0073 千代田区九段北3-1-1
靖国神社遊覧館内・地階

電話：03 (6380) 8943
FAX 03 (6380) 8952
http://ireikyou.com
振替口座 00140-6-334930

編集・発行人 圓藤春喜
印刷所 ヲダ印刷株式会社

目次

年頭のご挨拶	1
シベリア強制抑留を思う	4
パレンバン空輸挺進作戦と慰霊	7
三ヶ根山頂に「殉国七士廟」を訪ねて	11
占守島の戦い	13
事務局からの報告等	16

年頭のご挨拶



島村宜伸会長

新年おめでとございませう。会員の皆様並びに戦没者慰霊諸団体の皆様には、ご家族共々良いお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。また、旧年中は、当協議会の活動に多大のご協力、ご支援をいただき、心からお礼申し上げます。

さて、昨年は、国際情勢で大きな変化がありました。

米国では、1月に「米国第一主義」を掲げるトランプ大統領が就任して、内外政策が大きく転換し、多くの国々が関係の再構築を迫られています。

朝鮮半島では、北朝鮮の水爆実験の成功と北米大陸に届くミサイル開発の加速化が、国際社会で最大の不安定要因となり、北朝鮮の非核化を図る周辺諸国との間でせめぎ合いが続いています。また、韓国でも朴大統領弾劾の成立と親北文政権の誕生があり、不安定な状況が続いています。

中国では、10月の共産党大会を経て習近平独裁体制が一層強固なものとなり、軍事力・経済力を背景とした拡張主義が益々顕著になっております。

欧州でも難民受け入れ問題を巡り、諸国間の軋轢が大きくなっています。国内においては、森友・加計問題や

都議会議員選での小池都知事率いる都民ファーストの会の圧勝で安倍政権への信認が揺らぐ時期がありました。10月に政府への信任と憲法改正を訴えて衆議院の解散・総選挙に踏み切った結果、政権与党が圧勝するとともに、11月の米大統領訪日で安全保障の基軸となる日米関係も更に強固なものになり、引き続き安定した政権運営が期待できます。

また、誰よりも国民の安寧と幸せを祈るとともに、戦没者に心を寄せてこられた天皇陛下の生前退位を認める法律が成立し、象徴天皇の務めが安定的に続いていく途が拓かれたことは慶賀に堪えません。

当協議会の活動については、7月8日に例年どおり靖国神社において協議会と慰霊諸団体が合同で主催し、「平

靖国大絵馬は、愛知県名古屋伊勢絵馬協賛会安田織人氏から御祭神奉慰のため、昭和五三年から毎年奉納いただいているもので、横二・七六m、高さ二・一九mのジャンボ絵馬として新春の靖国の名物となっている。



成29年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を執り行うことができました。

諸団体のご協力、ご支援のお蔭をもちまして、266名(在宅参拝者を含む)の多数のご参加をいただき、厳粛に実施することができました。ご協力ご支援いただいた会員並びに慰霊諸団体の皆様には厚くお礼申し上げます。

次に戦没者遺骨収集については、「戦没者遺骨収集推進法」に基づき設立された「(一社)日本戦没者遺骨収集推進協会」(以下推進協会という)の活動が本格化した年でした。

当協議会も、慰霊諸団体のご意見をいただきながら、社員団体の一員として推進協会の活動に積極的に協力し、異郷の地で帰国を待ちわびておられる112万余の戦没者が一日も早くご帰還を果たされるよう尽力しております。新しい年を迎え、昨年の回顧とともに、当協議会の使命の重大性と寄せられる期待の大きさに改めて身の引き締まる思いがしております。

当協議会活動の柱の一つであります「戦没者慰霊崇敬思想の普及」については、戦友・遺族の老齢化とともに、大東亜戦争において日本軍将兵が苛酷な状況下でいかに良く戦ったか、アジア諸国の独立にどのように貢献したかを知らない世代が増えております。今

年も引き続きこの世代に焦点を当て、啓蒙活動して参りたいと思っております。

もう一つの柱であります「戦没者慰霊事業の継続」につきましては、例年同様、慰霊諸団体と合同の形で、7月7日に靖國神社において「平成30年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を執り行きますので、ご協力ご支援の程をよろしくお願い致します。

また、戦没者遺骨収集については、推進協会の本格的活動が2年目を迎え、活動が益々活発化すると思われ、今後遺骨収集の抜本的推進に努めるとともに、諸団体の海外戦没者遺骨収集参加希望者ができるだけ多く遺骨収集活動に参加できるよう尽力致す所存ですので、諸団体におかれましてはご要望等がありましたらお聞かせ下さい。

旧年を回顧し、新年への思いを思いつくまに記しましたが、私自身これらを思い描きながら、心新たに年頭の靖國神社の神前に額づきたいと思っております。

本年も、ご協力ご支援をよろしくお願い申し上げます。
平成三十年 元旦
公益財団法人
大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
会長 島村 宜伸

新嘗祭(にいなめさい)

戦前、日本では11月23日は、「新嘗祭」と言われる祭日であり、天皇陛下と共に国民あげて五穀豊穣を神に感謝する一日であった。

戦後進駐した占領軍は、天皇と国民が一体化することを恐れ、昭和22年12月に祝祭日の見直しを指示、神道・皇室祭祀に関する祭日の廃止を指示した。その結果、昭和23年制定された「国民の祝日に関する法律」で、この日は「勤労をたつとび、生産を祝い、国民が互いに感謝しよう『勤労感謝の日』」とされ、天皇と国民が一体となり祝っていた新嘗祭は宮中のみ祭祀へと変化した。しかしながら、神社等では逐次復活し現在に至っている。

靖國神社でも新嘗祭は、年中行事の内で重要な祭事に位置付けられており、その年に収穫された新米を御英霊とともにいただく慣わしとなつてい



る。

29年の新嘗祭は、生憎の雨であったが、拜殿には「靖國の御霊にふる里の新米を召し上がって頂く云」から献納された各地の新米が積み上げられ、雰囲気を盛り上げていた。

祭儀が終わるころには、雨も上がり、閑散としていた境内にも祭りらしい賑わいが戻り、餅つき大会の振る舞い餅には長い行列ができていた。

先の大戦では、「ふる里のお米を食べて死にたい」との思いを残しながら散華されたご英霊が多数に上ることを思い、「今日は新米を腹一杯お召し上がり下さい」と祈りつつ神社を後にした。
(圓藤春喜記)



謹賀新年

公益財団法人 借行社

会長	志摩 篤
理事長	富澤 暉
副理事長	塩田 章
副理事長	深山 明敏
副理事長	白石 一郎
副理事長	大越 兼行
専務理事	小柳 毫向
事務局長	若木 利博

公益財団法人 水交会

会長	藤田 幸生
副会長	古庄 幸一
理事長	齋藤 隆
副理事長	加藤 保
専務理事	赤星 慶治
事務局長	本多 宏隆

航空自衛隊退職者団体

つばさ会

会長	外菌 健一朗
副会長	岩崎 茂
副会長	溝口 博伸
副会長	戸田 眞一郎
副会長	片山 隆仁
副会長	鹿股 龍一
専務理事	吉岡 秀之

公益社団法人 隊友会

会長	藤縄 祐爾
理事長	先崎 一
常務理事	増田 好平
常務理事	吉川 榮治
常務理事	外菌 健一朗
常務執行役	久納 雄二
事務局長	植木 美知男

一般社団法人

日本郷友連盟

会長	寺島 泰三
副会長	森 勉
専務理事	新井 光雄
専務理事	勝木 俊知
事務局長	富田 稔
理事	倉田 英世
理事	中村 弘

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長	杉山 蕃
理事長	藤田 幸生
副理事長	岩崎 茂
専務理事	衣笠 陽雄
事務局長	石井 光政

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長	島村 宜伸
理事長	柚木 文夫
専務理事	圓藤 春喜

株式会社 SNA

株式会社

キャリアコンサルティング

軍学堂

医療法人社団 伍光会

株式会社 再生日本21

株式会社 青林堂

特定非営利法人

孫子経営塾

同台経済懇話会

株式会社

防衛システム研究所

株式会社 リエイト

シベリア強制抑留を思う

去る平成29年4月7日、ロシア政府提供になるシベリア抑留死者名簿1093名が公表された。戦後50年を経て開示された旧ソ連時代の公文書の中で日本人抑留死者名簿の存在が判明し、日露政府間協定に基づき、発見次第、逐次に日本側に資料提供されているものの一部で、今回提供分をもってシベリア地域（モンゴル地域を含む）抑留日本人死者のロシア側による特定は、3万9761名となった。日本政府公表のソ連地域抑留死者推定数5万5千名とはまだまだ乖離があるが、引き続きロシア側の協力によって追加名簿が発見・提供されることを期待するものである。

ともあれ、大東亜戦争終結直後、50万人とも60万人ともいわれる日本軍人及び民間人が、不法にもソ連領シベリアなどに連行されて強制労働に従事させられ、極悪の条件下で多くの死亡者を出したことは紛れもない事実である。ソ連崩壊後に誕生したロシア政権は、ソ連時代のこの悪業を知らぬ存ぜぬで類破りしているが、この人類史上稀に見る暴挙、国際犯罪を、被害者国日本

としては、看過することなく糾弾し続けるべきである。また抑留死者の遺体の多くは、まだシベリアの原野に埋もれたままである。戦後70余年、これらご遺骨の収容も急がねばならない。戦後は未だ終わっていない。

シベリア強制抑留のあらまし

振り返って、このシベリア強制抑留なる人類史上未曾有の暴挙の実態は、如何なるものか。

昭和20年8月9日、ソ連軍は、満州樺太、千島方面において怒濤の侵攻を開始した。日ソ中立条約を踏みにじったの侵攻である。対する日本軍は、各所で勇戦敢闘した後、8月15日、ポツダム宣言を受諾して全軍が整斉と戦闘行動を中止した。しかしソ連軍は、それを無視して更に進撃を続行し、満州樺太、千島の全土を占領した。

日本が受諾したポツダム宣言は、その第9項で「日本国軍隊は、完全に武装を解除せられたる後、各自の家庭に復帰し、平和的生産的に生活を営む機会を得らしめるべし」と謳っており、当然ソ連もこの宣言に合意している。ところがソ連軍は、日本軍将兵の武装解除後も一切復員を認めず、それぞれ何の説明もなしに、次々と貨車に詰め込んでソ連領内へ集団で連行し、

強制労働に従事させた。「ダモイ、ダモイ」（ロシア語で「故郷へ」「我が家へ」の意）と騙され、帰国の喜び一杯で乗り込んだ貨車の着いた先がシベリアの僻地だった日本軍将兵の落胆は計り知れない。

抑留者は、主として軍人であったが、

他に満州開拓団の農民、満州国の官吏、南満州鉄道などの社員、従軍看護婦なども含まれる。満州地域のみならず、朝鮮北部、樺太、千島地域からも続々と連行され、その数57万4530人（日本政府調べ）の抑留者は、シベリア、極東ロシア、中央アジア、モンゴル、欧州ロシアなどの約1200カ所に及ぶラゲリ（収容所）に収容され、森林伐開、鉄道建設、鉱山労働、土木建設、港灣鉄道荷役、農業など様々な重労働に強制的に従事させられた。その間、極寒、飢餓、疫病など劣悪な環境条件、過酷な重労働、時には非人道的な取扱いの中で、約5万5千人（日本政府調べ）の抑留者が、帰国の夢を果たせぬまま尊い生命を落とされた。

日本政府からの懸命の働きかけにより、1946年12月から漸く帰国（いわゆる引き揚げ）が開始されたが、1956年の日ソ共同宣言に基づく最終引き揚げまでに実に11年の歳月を要したことは、「岩壁の母」エレジーなど、多くの日本人の記憶に未だ新しい。

シベリア抑留生起の経緯

ではそもそも、このシベリア強



制抑留なる暴挙(国家的犯罪)は、如何なる経緯で起こったのか。

その発端は、1945年8月23日の国防人民委員会決定に基づく同委員会議長スターリンによる極東ソ連軍総司令官・ワシレフスキー元帥に対する次のような秘密指令にある。即ち、「極東、シベリアの環境下での労働に適した日本軍捕虜50万人を選別せよ」。更にスターリンは、この秘密指令の中で、捕虜を千人単位の建設大隊に編成し、その行く先としてハバロフスク、チタイルクーツクなど10カ所を指示したものである。

そもそも日本軍将兵の取扱については、ポツダム宣言受諾後の8月16日、モスクワから「日滿軍捕虜のソ連領への移送は行わない。捕虜收容所は出来る限り日本軍の武装解除の場所に設ける。・・・」という指示電が出ている。発信者は内務人民委員ベリア、国防人民委員代理ブルガーリン、参謀総長アントノフである。ところが突如、前述の8月23日付スターリン秘密指令である。一体、何がこの間に起こったのか。スターリンは8月16日、トルーマン米大統領に対し日本軍の降伏受け入れ後のソ連占領地域に千島列島全部と留萌・釧路以北の北海道北半を加えることを提案し、特に後者の提案は日本が

行ったシベリア出兵(1918年)に対する報復であり、これらの「控えぬ必要望」に米は反対しないよう望んだ。

しかし、18日にスターリンが受け取った17日付の書簡でトルーマンは、千島は認めるが北海道北半の占領は拒否した。スターリンは、すぐには決断出来なかったであろうか、22日になって18日受領のトルーマン書簡に対する回答を送り、不満露わであるが北海道北半占領を断念した。そこで以下、推測の域を出ないが、スターリンは、北海道占領を断念した代償として翌日指令を出し、大量の日本軍捕虜を労働力として利用することにしたのではないかと、この見方をする学者も多い。

なおこの間の8月19日、ポツダム宣言受領直後の彼我両軍の混乱を收拾し停戦を円滑化する目的で、秦関東軍総参謀長とワシレフスキー極東ソ連軍総司令官による停戦交渉がジャリコヴォのソ連第1極東方面軍戦闘司令部で行われた。世にいうジャリコヴォ会談である。巷間、この会談で日本軍将兵のソ連強制連行・労働従事に関する密約が交わされたかの風説が伝えられているが、モスクワ・東京の頭越しに現地軍人同士が勝手にそんな約束をするなど、あり得ない話である。事実、最近のロシアの公文書公開により、ソ連

軍が押収した関東軍関係文書の中に、8月19日付参謀総長名の停戦に関する指示電があり、その内容はこれまで日本国内の調査でジャリコヴォ停戦協定と言われてきたものと一致している。またその後、8月29日付の関東軍総司令部からワシレフスキーに対する報告書でも、シベリア抑留を示唆するような内容は皆無で、密約のような事実はなかったことは明らかである。

シベリア強制抑留・労働の実態

ソ連は、対独戦で働き盛りの兵士・民間人を2百万人以上失い、労働力不足を補うため、各国捕虜・労働者を戦後の国内労働に駆り出した。また、スターリンの独裁政治は、政治体制に批判的な市民を有無を言わず政治犯として拘束し、シベリア開発などの強制労働に投入した。シベリアに強制連行された日本軍将兵は、それら政治犯と共に、時には政治犯以下の扱いで、過酷な労働に従事させられた。また、8月9日以降の日ソ交戦で、軍人として当然の任務を果たした日本軍の多くの将兵が、「ソ連兵を殺傷した」「ソ連軍に対し攻撃を指示した」などの咎で、ソ連の国内法を口実に裁判(といっても形だけの)にかけられ、「重労働10年」「20年」の刑が申し渡され、監獄

に入れられ、長期間にわたりシベリアに拘束され重労働に服役させられた。抑留者に科せられた労働は、鉄道建設、森林伐採、炭鉱・鉱山労働、土木・建設作業、荷役作業、農作業など様々であるが、いずれも劣悪な住環境、粗末な給養、極寒、昼夜を問わぬ過酷な労働に苦しめられた。

なかでも鉄道建設に従事させられた抑留者は悲惨であった。第2シベリア鉄道(バム鉄道)建設に投入された日本人抑留者は約5万人に及び、零下20度の酷寒(時には零下60度を記録したこともあったという)の中、最初の冬は穴を掘って野宿し、人跡未踏の原始林を切り拓いて進む難工事に従事させられた。森林伐採の作業は吸血虫ムシカや体内に入り込んで血を吸う森林ダニとの戦いでもあった。

鉄道敷設は前年の夏から冬にかけてツンドラ地層を2〜3以下の不凍土まで掘り下げ、春から鉄道敷設に取り掛かる。冬季、岩のように固い凍土をツルハシで崩してゆく。10回もツルハシを握れば先が丸くなるので、ヤスリで尖らせ、又作業を続ける。1日の作業だけでも疲労困憊したという。

食事はと言えば、僅かの黒パンにジャガイモが1〜2片浮いた程度のスープだけ。掘立小屋の收容所(ラーゲリ)

には満足な暖房もない。着の身着の儘の生活は、ダニ、シラミ、皮膚病の温床でもあった。

酷寒、栄養失調、疫病、過重な労働の下、多くの犠牲者が出た。イルクーツク大学クズネツオフ教授の調査記録によれば、バム鉄道沿線のタイシエツト〜ブラーツク間約300kmだけでも、35カ所の埋葬地があり、2652名の日本人死没者が埋葬されているとの記述がある。

労働の過酷さは肉体的問題であるが、今一つ、それにも増して抑留者を精神的に苦しめたのは、いわゆる「民主運動」である。抑留日本人に対し、ソ連は一部の日本人を僱傭して「民主運動」なるものを組織し、その支配下で洗脳、戦犯造成、労働強化など極めて陰惨な政治工作が各收容所で繰り返された。

彼らの言う日本帝国主義・天皇制の矛盾と罪悪を指摘し、反面、ソ連の言う平和主義・共産主義を宣伝する集会が昼夜を問わず開催され、抑留者は強制的に参加させられた。将校・下士官の多くは「反動」呼ばわりされ、休憩時間に車座の前に立たされ、かつての上官・同僚も満座の中でツルシアゲられ、「自己批判」を強制された。

シベリア民主運動の洗礼は、労働の苦しみと共に、シベリア抑留者に共通

の思い出したくない苦い思い出である。バム鉄道建設に従事させられた抑留者の惨状を例に挙げたが、他の抑留地も大同小異の過酷な状況であったことは、論を待たない。しかし残念ながら、ソ連崩壊後の新生ロシア国は、忌まわしい暗黒独裁時代のソ連を思い出したくないのか、当時の記録・資料の殆どが抹消されたり散逸してしまっている。

1991年、ゴルバチョフ大統領(当時)がハバロフスクの日本人墓地を訪れ、抑留者団体代表者とも僅か数分間の会見をしたが、たった一言、「同情する」と述べただけに終わった。ソ連は加害者、日本は被害者なのに、罪の意識なぞさらさらしないソ連を代表する大統領の言葉に、唾然とさせられた。

我々は、抑留帰還者の記憶を基に、50万人とも60万人ともいわれるシベリア強制連行・強制労働を強いられた日本人のことを、またその間に非業の死を遂げた5万5千余人の抑留死者のことを、忘れることなく世界に、後世に語り伝え、この近代人類史上稀に見るソ連の暴挙の事実を、被害者として糾弾し続けねばならない。将来、日露両国間で平和条約を締結するに際しては、何よりも先ず、ロシア政府がその国際的犯罪のことを日本国民に謝罪するの

が先決であると信ずる。

シベリア抑留死者の慰霊と遺骨收容

敢えて繰り返す。シベリア抑留死者は、国のため雄々しく戦い、戦場に散った戦没者ではない。戦争が終結し、任を終えて帰国を待つ身を、騙されてシベリアに送り込まれ、囚人以下の過酷な労働を強いられ、命を落とした憤死者である。だからこそ、その憤りや苦しみ、残された遺族の悲しみや悔しさは計り知れないものがあり、日本国民としては、戦没者にも増してその慰霊に心しなければならぬ。ご遺骨の收容についても同様である。

シベリア抑留死者は、それぞれの收容所が埋葬地を設け、死者の埋葬に際しては、抑留同僚が埋葬に立ち会って

いることが多い。しかしながら、戦後のソ連時代は、その閉鎖性と秘密主義からシベリアの辺境に外国人が立ち入ることが許されず、漸く日本人による慰霊巡拝・遺骨調査が可能になったのは、平成3年のソ連崩壊以降だった。

ソ連という国そのものの崩壊に伴い、ロシア側にソ連時代の記録・資料が殆ど無い中、各戦友会の有志は、かつての收容所跡を訪ね、地元民の協力を得ながら、手探りで戦友の埋葬場所を探索する活動を開始した。勿論、これら

は全て私費による活動であり、また抑留を経験した年配者達の高齢を押しつけての探索行である。なかには、毎年夏の1〜2カ月、現地に滞在して調査に携わった篤志家もおられる。異郷に残した戦友を故郷に連れ帰りたい一心で、己れを捨てての壮絶な行動力に、ただただ頭が下がる思いである。

50年以上前の記憶を辿りながらの活動であり、また開発が進み地形も変ってしまっていることもあり、困難な探索と聞くが、これらの方々の懸命な努力により、目途がついた埋葬地情報も逐次厚生労働省に報告され、それに基き平成3年から毎年数次の政府遺骨調査団・収集団が旧ソ連地域に派遣され、少しずつではあるがご遺骨の收容が進んでいる。

平成28年度末現在、旧ソ連地域からのご遺骨帰還総数は累計1万8121柱であり、抑留死者総数5万5千人にはまだまだ程遠いが、今後の日露両政府の協力も進んで、更に1柱でも多くのご遺骨の故国への帰国が果たされることを心から祈念するものである。

(柚木文夫記)

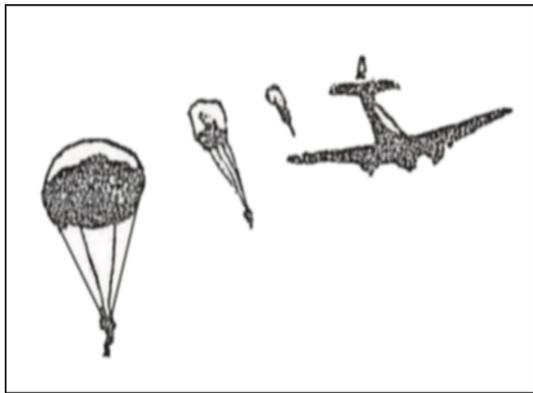
パレンバン空輸挺進作戦と慰霊

その2 作戦実施

和泉 洋一郎

二 パレンバン空輸挺進作戦実施の概要

1 挺進攻撃命令下る



昭和17年2月10日、第1挺進団長久米精一大佐（陸士31期）から挺進第2連隊長甲村武雄少佐（陸士38期）に「挺2は、2月14日、一部をもって精油所を、主力をもって飛行場を攻撃し、これを奪取すべし」との命令が下った。

（作戦参加部隊）

○第1次降下部隊

挺進第2連隊長以下339名

◇飛行場攻撃部隊

挺2連隊長以下240名

連隊本部（17名）

通信班（30名）

第2中隊（96名）

第4中隊（97名）

◇精油所攻撃隊

第1中隊長以下99名

西精油所地区（60名）

東精油所地区（39名）

○挺進飛行隊

新原秀人少佐（陸士40期）

各種輸送機33機

○協力重爆隊（物料戦隊）

飛行第98戦隊

大坂順次中佐（陸士35期）

97式重爆27機

○協力掩護戦闘隊

◇飛行場地区

飛行第64戦隊

加藤健夫少佐（陸士37期）

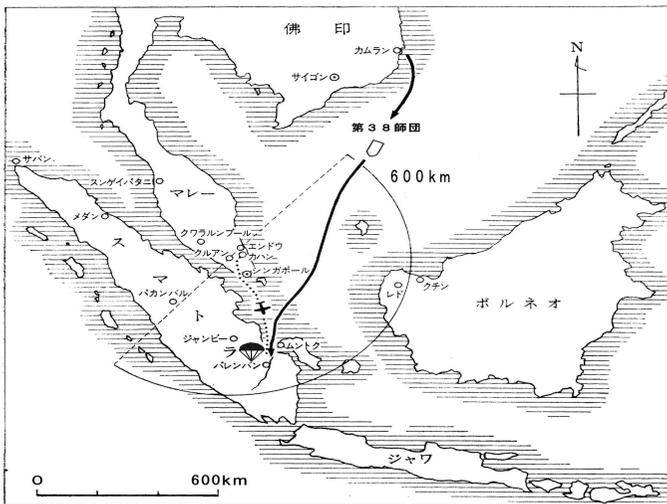
一式戦（隼）15機

◇精油所地区

飛行第59戦隊

中尾次六少佐（陸士40期）

一式戦（隼）17機



士29期

2 空挺降下

2月14日0840、甲村連隊長以下第1次降下部隊は、輸送機33機に乗りしてマレー半島南部のカハン飛行場を離陸、物料編隊（97式重爆27機）と合流してパレンバンに向かった。途中眼下に陥落寸前のシンガポールから立ち上る黒煙を視認した。100機近い大編隊であった。

1120、ムシ河口上空に達し、飛行場方向と精油所方向に分進。飛行場攻撃部隊は1126、精油所攻撃部隊は1130、それぞれ高射砲火を

○第2次降下部隊
挺2第3中隊長以下96名
2月15日降下予定

この他、速射砲を搭載して輸送機1機でパレンバンに胴体着陸する挺進団長以下6名。パレンバンで地上連携するためムシ河を溯航する歩兵第229連隊主力（連隊長田中良三郎大佐・陸

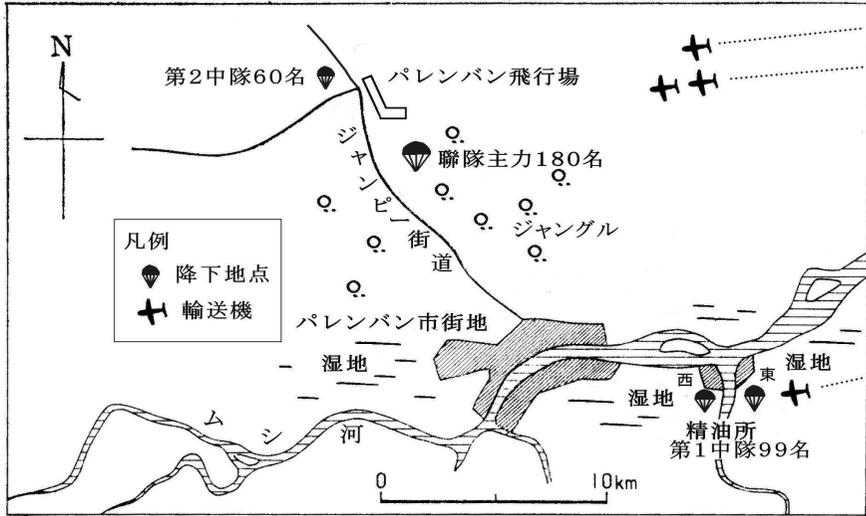
冒して降下を開始した。それに続く物料編隊は、物料箱を重畳投下した。上空掩護に任じる飛行第64戦隊は上空の連合軍戦闘機を撃退して降下部隊を掩護した。航空機の損害は対空砲火によって自爆した飛行第98戦隊の重爆1機と被弾により強行着陸した挺進飛行隊の輸送機1機に留まった。

3 パレンバン飛行場攻撃
飛行場攻撃部隊は、東南地区には

ジャングル内に降下してしまっただけで、ジャングル

両を目標としたため、道路脇に遮蔽して

待ち受けた。車列が坂の頂上付近で極



「挺2」副官中沢武中尉（幹候特）を先頭に180名（連隊本部、第1、第4中隊）が、南西地区に第2中隊の60名が降下した。計器速度は約200km、高度は2000〜2500mであった。連隊長最後の訓示は「攻撃精神を最高度に發揮し、奇襲に次ぐ奇襲をもつてするのみである。挺進報国の至誠に徹し、任務に向かって鉄火の一丸となつて邁進せよ」であつた。

第4中隊は飛行場東南約1km地域に降下して、パレンバン飛行場を攻撃占領するはずであつたが、蘭印軍対空砲火等の影響もあつて3kmほど離れた

に足を奪われた。そうしたなか第3小隊長奥本實中尉（陸士54期）は、降下時搭乗機の扉が遅れ、シヤンピ街道近くに降着してしまつた。急いで飛行場に向かうとして道路に出たが掌握しているのは4名だけであり、武器は手持ちの拳銃と手榴弾だけであつた。（前回号でも説明したように、当時の降下技術では、自衛用の拳銃しか携行出来ず、地上戦闘を行うためには他の飛行機から投下される「物料箱」に格納してある小銃等を回収しなければならなかつた。しかし、ジャングル内では見通しが悪いので、物料箱を見つけることは困難であつた。）

おりから北方の飛行場からパレンバン市に向かうとしていた蘭軍車両四両を目標としたため、道路脇に遮蔽して待ち受けた。車列が坂の頂上付近で極端に減速したところを狙つて一斉に道路上に飛び出し、14年式拳銃により射距離10mほどで1両目と2両目の操縦手を射殺したところ、1両目は脱輪、2両目は横転した。時刻は1148であつた。残りの車両にも肉弾攻撃を掛けた。奇襲を受け大混乱した敵兵は戦意を

「挺2」副官中沢武中尉（幹候特）を先頭に180名（連隊本部、第1、第4中隊）が、南西地区に第2中隊の60名が降下した。計器速度は約200km、高度は2000〜2500mであった。連隊長最後の訓示は「攻撃精神を最高度に發揮し、奇襲に次ぐ奇襲をもつてするのみである。挺進報国の至誠に徹し、任務に向かって鉄火の一丸となつて邁進せよ」であつた。

第4中隊は飛行場東南約1km地域に降下して、パレンバン飛行場を攻撃占領するはずであつたが、蘭印軍対空砲火等の影響もあつて3kmほど離れた



蘭軍車両縦隊の襲撃

失い降伏した。それらを武装解除しているところに、今度は反対側の市街地側から装甲車を先頭に前進してくる車列(4車両、兵員約150名)を発見した。その頃に小隊は14名となっていたので、打って返してこれも奇襲し、完全に敗走させた。30分間程度の戦闘であったが、敵に与えた損害は遺棄死体数十名、装甲車1両、トラック4両を数えた。小隊の戦死者は3名、負傷者は5名であった。

これは局所戦であったが作戦全局に大きく寄与した。つまり、連合軍守備隊を飛行場地区と精油所地区に分断させ、総合的な作戦指導を不可能にさせた。加えて、降下部隊の戦力を極めて過大視させることになり、蘭軍守備隊に疑心暗鬼を生じさせ、自主撤退を早めさせたのである。

降下地帯は身長以上の樹木が密生するジャングルである。これでは降下したものの、奥本中尉のように部下を掌握することも物料箱を回収することも出来なかった。

それでも奥本中尉が善戦し得たのは旺盛な挺進精神に拠るものであろうが、もう一つの大きな要因は、地形の特性を勘案して不意を衝く戦機を看破したことにありと思われる。その鍵は坂の頂上であった。

なぜ坂の上なのかについて若干説明しておかなければならない。ムシ河流域に広がるパレンバン市街地は標高2mほどしかない低湿地帯であり、飛行場適地は北側12kmにある標高200mの高台しかなかった。この間の地域は水系の關係で比高10m内外の波状地形となっており、飛行場と市街を結ぶジャンピー街道はアップダウンを繰り返す道路であった。(現在でも同様の形状)

下り坂を全力走行する車列に14年式拳銃を発砲しても糠に釘である。それより確実に阻止できる頂上という場所の特性を見極めて突撃した奥本中尉の機転が功を奏した。単なる蛮勇ではなかった。

4 飛行場占領

飛行場攻撃部隊は東南方向と西南方向から挟撃するように蘭軍守備隊を攻撃した。14日夜になっても甲村連隊長が掌握できたのは人員・武器とも半分以下に過ぎなかった。しかも通信機が回収出来なかったため、精油所地区の状況を把握することも出来なかった。他はジャングルに呑み込まれてしまったのである。

それでも、攻撃精神旺盛で1920過ぎには飛行場事務所地区を占領し、2100ごろには飛行場周辺の敵を掃

蕩することが出来た。

一方、飛行場西側地区に降下した第2中隊長廣瀬信隆中尉(幹候)は、掌握した兵2名を率いて前進し、1400ごろ飛行場西側兵営前に進出したところ、約350名の連合軍部隊がいるのを発見した。同中尉は、いったん引き返し、さらに兵1名を掌握し、1700部下2名とともに兵営に突入して、これを占領した。

これより先、第2中隊第1小隊長蒲生清治中尉(幹候)は、降下直後16名を掌握したが、兵器弾薬の収得が思うようにできず、しかも付近の兵営近くの高射砲陣地から高射砲、高射機関銃の零距離射撃を受けたので、その制圧を企図して手榴弾と拳銃を持って前進し、兵営に火を放ち、これを焼き払った。

しかしながら、不意に現出した高射機関砲弾を受けて蒲生中尉は戦死し、その後吉永曹長が小隊を指揮し1820飛行場西北端付近に進出した。

こうして、甲村部隊は飛行場を占領し、夜半までに集結した全兵力をもって、至嚴な警戒の下に夜を徹した。この夜緩慢な銃声を聞いたが連合軍部隊の逆襲はなかった。

蘭軍は、諸所で奇襲を受けて大混乱していた上に日本軍の増援部隊がムシ

河を前進中であるとの情報があったことから、本格的な戦闘を行うことなく早期に飛行場を放棄することに決したのである。

翌15日1340には、第2次降下部隊である第3中隊長桑沢喜中尉(幹候)以下96名がパレンバン飛行場に空挺降下した。

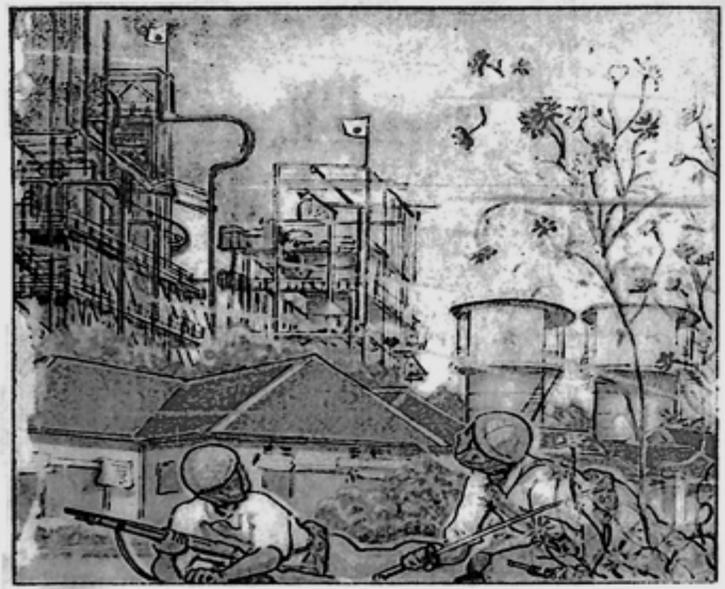
5 精油所攻撃と占領

作戦では飛行場確保が優先されたが、戦略的には精油所確保が最重要であった。パレンバンには東西2カ所の精油所があり、西精油所は蘭系企業のブラジュー、東精油所は米系企業のスングエロンであった。

いずれも世界有数規模の精油所で、そのなかには当時極めて貴重であった高オクタン価航空ガソリン製造用の装置も含まれていた。帝国陸軍にとつては垂涎的であった。

精油所攻撃部隊は、中尾基久中尉(幹候)率いる第1中隊の99名であり、東精油所南側と西精油所西側の2カ所に分かれて1130降下した。西精油所は中隊主力の60名であり、東精油所は第3小隊の39名であった。

両精油所を防衛する蘭軍は大尉指揮する550名であったから5倍以上の敵だったことになる。



精油所の攻撃

西精油所西側に降下した中隊長中尾中尉は、とにかく焦っていた。敵が破壊する前に占領しなければならなかったからだ。

しかし、降着した地域は開豁した湿原地帯で、武器等の回収に手間取っただけでなく、敵の直接照準射撃に晒されて身動きが取れない状態に陥ってしまった。

岡両分隊にその確保を命じて、その確保に成功した。

夜になると連合軍は頻繁に逆襲してきたがその都度必死で撃退したところ、夜明けには敵影を見なくなった。連合軍は精油施設を大して破壊することなく夜間のうちにムシ河から撤退したのであった。新たな日本軍がムシ河を遡航してくるといふ情報を得たことで慌

確保した無線機で甲村連隊長に連絡を取ったが通じなかった。本隊の方では無線機を回収出来ていなかったからだ。あとは小隊長に任せるしかなかった。

混成特殊小隊長 徳永悦太郎(陸士53期) 中尉は、降着後6名の寡兵を率いて敵のトーチカを沈黙させ、敵を追って精油所内を北上したところ、すぐ右手に目指す精油施設を見た。おりから追及してきた小川、吉

たのである。

東精油所南側の第1小隊は、増水した田圃のような湿原であり、武器回収に小舟を要したため攻撃までに時間を要した。さらに東精油所に向かうにはトーチカ群が構える幅3〜4mの一本道を進むしかなかった。

攻撃態勢をとるため敵前100mまで接近した第2小隊長長谷部正義少尉(幹候)は敵弾を受け戦死してしま

指揮を受け継いだ丹羽曹長は、昼間の突撃は無理と判断し夜間攻撃に転移することにした。そして2300、小隊長の引合い合戦とばかりに攻撃を再興した時には、敵の抵抗はほとんどなく翌15日1000ころまでには東精油所を占領することができた。

敵は、一部の石油タンクを破壊しただけで組織的にムシ河から撤退した。ムシ河はパレンバン市街地南側を流れる全長750kmにおよぶスマトラ最大の河で、河口からパレンバンまでは約90kmあり、石油積み出しのため大型タンカー船も航行可能なように整備されている。そのため連合軍が舟艇で撤退することは容易であった。

また、日本軍にとつては降下部隊と最も早く提携できる経路として活用できたし、攻略後は本国への石油輸送路

たのである。

東精油所南側の第1小隊は、増水した田圃のような湿原であり、武器回収に小舟を要したため攻撃までに時間を要した。さらに東精油所に向かうにはトーチカ群が構える幅3〜4mの一本道を進むしかなかった。

攻撃態勢をとるため敵前100mまで接近した第2小隊長長谷部正義少尉(幹候)は敵弾を受け戦死してしま

指揮を受け継いだ丹羽曹長は、昼間の突撃は無理と判断し夜間攻撃に転移することにした。そして2300、小隊長の引合い合戦とばかりに攻撃を再興した時には、敵の抵抗はほとんどなく翌15日1000ころまでには東精油所を占領することができた。

敵は、一部の石油タンクを破壊しただけで組織的にムシ河から撤退した。ムシ河はパレンバン市街地南側を流れる全長750kmにおよぶスマトラ最大の河で、河口からパレンバンまでは約90kmあり、石油積み出しのため大型タンカー船も航行可能なように整備されている。そのため連合軍が舟艇で撤退することは容易であった。

また、日本軍にとつては降下部隊と最も早く提携できる経路として活用できたし、攻略後は本国への石油輸送路

として最適であった。

ムシ河を遡航した第38師団の先遣部隊である歩兵第229連隊主力(連隊長田中良三郎大佐)は、独力で15日1930ころ、ムシ河北岸市街の東部に上陸し、降下部隊と合流することが出来た。

任務を達成出来たのは、制空権の獲得、企図の秘匿等々あるが、一番は、降下部隊が甲村連隊長の「鉄火の一丸」訓示通りに敢闘したことが大きい。

「挺2」の死傷者は84名(内戦死37名)で、少ないように思えるが、降下後の戦闘に参加したのが実際のところ100名前後であったから、まさしく一騎当千で獅子奮迅の如く戦い、ほとんどが死傷したことになる。苛烈を極める数字であり、まさに神兵の為せる快挙であった。

*降下人員については、文献によって若干の違いがあるが、本稿では戦史叢書「蘭印攻略作戦」に依った。

*挿図は小川物治編集「陸軍落下傘の神兵」(神州書房)を使用

(続く)

三ヶ根山頂に 「殉国七士廟」を訪ねて

石垣 貴千代

一「殉国七士廟」について

三ヶ根山は愛知県西尾市三河湾を望む景勝の地であり、「殉国七士廟」はその頂きにある。



殉国七士墓

殉国七士とは、「東京裁判」で知られる極東軍事裁判によって有罪判決を受け、絞首刑に処せられた七人の方のことである。刑死された七人の方のお

名前をここに記す。

東條 英機 元首相・陸軍大将

土肥原 賢二 元陸軍大将

広田 弘毅 元首相

板垣 征四郎 元陸軍大将

木村 兵太郎 元陸軍大将

松井 石根 元陸軍大将

武藤 章 元陸軍中将

裁判は占領下の昭和21年5月3日に始まり略2年に亘って行われ、23年11月12日に判決が言い渡された。

刑の執行は12月23日だった。(23日は当時皇太子だった今上陛下のお誕生日。恐らくそれは意識されていたのではないか。)

三ヶ根山に墓所があることを知っている日本人は今も少ない。ドイツの戦争犯罪を裁いたニュルンベルグ裁判では死者の遺骨は航空機から洋上に捨てられたという。刑死者を語る如何なる手掛かりも残さないためだ。

東京裁判は、日本の戦争をドイツと同様平和に対する罪(侵略戦争を計画し共同謀議によってこれを達成した戦争犯罪)として、事後法で裁いた。

12歳で終戦を迎え、裁判の進行当時14・15歳だった自分自身のことを考える。

空襲を受けなかった地方都市に居たため、敗戦の落ち込んだ気分は間もな

く過ぎて、所謂「戦後民主主義」がやって来た。軍事裁判の報道は新聞ラジオで伝えられていたが、学校で話題になる事は無かったと思う。しかし、侵略戦争の言葉と、残虐行為の印象は強く残った。

判決が出たのは高校1年の11月、12月に刑が執行される。新聞の大きな記事として記憶にあるが、日本史にとつての重大事件という理解はできなかった。

最近になって、戦後復讐された「ボツダム中尉」に伺ってみた。「当時東京裁判の判決をどう思われましたか」、答えは、「いや、どうやって食べて行くか精一杯で、考えている余裕が無かったね・・・。」そうなのだ。それが敗戦時の大人、青年の現実だったとしても不思議はないかもしれない。

占領軍による矢継ぎ早の社会変革という混乱の中に居て、一般の日本人はただ食べる事に追われ、戦争を7人の方々の死によって終わらせたかったのかも知れない。しかし、70年が経とうとしている今、それで良いのか。その後日本は、裁判の事実と意味を根本から考え、歴史を共有するという不可欠な努力をしたのだろうか。

三ヶ根山頂に「A級戦犯」刑死者7人の方の墓所がある、そのことを長い間私は知らなかった。知ったのは僅か

7年前のことだ。海兵71期の潜水艦乗りの奥様が、読んで下さいと送って下さった冊子、「殉国七士の墓―建立の経緯について」を読んでからだ。彼女も友人から頂いた冊子と言う。

その友人が東京裁判で小磯国昭元総理の弁護をされた三文字正平氏の息女だった。耳慣れない「三文字」の姓は、この時以後決して忘れられないお名前になった。もし、三文字氏がいらっしゃらなかつたら、刑死された7人の方のご遺骨が、永遠に失われたらどうこと、は明らかだ。

絞首刑執行後、ご遺体が遺族に渡されないこと分かった時、執行の日時・焼き場を米軍の関係者から聞き出して、遺骨の奪取を計画し実行されたのは三文字正平氏なのだ。その決死行に賛同協力する同志があつた。横浜の興禅寺の住職市川師、火葬場の場長飛田氏。米軍に見つかる危険を冒して闇夜の火葬場に忍び込み、更に取得した遺骨を、用心のため七士のお名前でなく戦死された三文字氏の甥のお名前を当てて興禅寺で供養されていたという。

総じて戦犯に冷たかつた日本社会の雰囲気を知る者にとって、このような志を持った方々、いや日本人の心を持った方々が、あの時代の日本に居た事を思うと、胸が一杯になる。「時代を覆

う雰囲気が決めるような判断」は、決して正しくない事を、私たちは肝に銘じるべきだろう。

三文字氏は、サンフランシスコ平和条約締結と同時に「殉国七士廟」の建設運動を開始される。長い間、熱海伊豆山の興亜觀音堂（松井右根大将建立）に安置されていた七士の遺骨は、三ヶ根山上の墓所に移されることになった。どうして三ヶ根山か。ここにも東京裁判で橋本大佐の弁護を務めた林逸郎弁護士と地元愛知県選出の県議三浦健吉氏の御縁があった。

そして遂に昭和35年8月16日に墓前祭が挙行される。戦後15年、七士没後12年であった。

二 三ヶ根山を訪れる事になって

七士の廟が建立されてから今年で57年になる。戦後史の読み直しを始めて以来、私は不思議な御縁に恵まれ様々な出逢いを頂いた。大徳孝子さんとの出会いもその貴重な一つだ。

お誘いを受けて昨年11月3日、伊良湖岬にある「全海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑」の追悼式に出席することができた。この追悼式については「慰霊」39号に紹介させて頂いたが、本当に心が洗われる様な経験だった。今年もお参りしようと早くから計画が立てられ

て、大徳さんのご息女園井さんからのメールが入っていた。

再びの伊良湖岬。見返れば遙か三河湾の奥に、その三ヶ根山はある。そう気が付くと急に七士廟が身近に感じられて、豊橋あたりで下して頂けば後は独りで何とかなるかと、方向音痴のボンヤリのまま考えた。そんな事を言っている資料をお送りすると、大徳さんは直ぐに同行の石井光政さんと連絡をとって、今年の伊良湖岬慰霊祭に三ヶ根山訪問を加えて旅程を決められた。

間もなく園井さんから、予約したホテルの名前、ドライブの行程、時間などが知らされた。みんなで行くことになったのだ。嬉しかった。三文字正平氏の「殉国七士の遺骨を葬るまで」を読んだ時の衝撃が改めて思い出された。それを大徳さんも石井さんも読んでいらつしやる。同じ思いなのだと分かる。メールの向こうに「皆で行こう」と、話し合っているお顔が見えるようだった。

三 「全海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑追悼式」から蒲郡へ

去年と同じように相模大野から石井さんにお世話になって、伊良湖岬まで車窓の風景とお喋りを楽しんだ。予報通りお天気も回復して、「今日ドライ

プしないで何時するんだーですね」と石井さんが笑う。

「国民休暇村伊良湖」へ近づく頃に夕暮れて、真っ赤な太陽が右手の海に大きく沈むのを見る事ができた。宿の屋上にある「満天テラス」からの眺めが、また素晴らしかった。遠くの海の灯りや星座を係りの方が説明して下さるのが面白い。その時長い尾を引いて星が頭上を飛んだのだ。居合わせた皆が、「おっ」と声を上げる。珍しい大きな流れ星に、それぞれの感動があったに違いない。明日の慰霊祭を控えて、亡くなった方の魂のようにも思われた。



全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑追悼式

追悼式の11月3日は昔から晴れと決まっていた、旧世代には懐かしい明治節だ。今年も晴れ。伊良湖自治会長の司会で伊良湖神社荒木田宮司が斎行された。青い空と海、掲げられた中將旗に映えて宮司さんの白い広袖が美しかった。慰霊碑が建立されてから46回目の追悼式になるという。全国の海洋戦没者を偲んでこの地域で守り続けている慰霊のお祀りを、本当に尊いと思う。高台を降りて渥美半島先端の伊良湖岬灯台まで散策を楽しんだ後、翌日の三ヶ根山訪問のために蒲郡へ向かった。豊橋では無く蒲郡で一泊する。

四 いよいよ三ヶ根山頂の「殉国七士廟」へ

三ヶ根山へは今有料道路三ヶ根スカイラインで行くことができる。今年4月29日には第67回の墓前祭が行なわれたのだそうだ。幅の狭い七曲りの道をゆっくりとしたスピードで登って行くこと明るい台地に出た。「殉国七士廟参道」の標識に従って更に入る。巨大な石の門柱があつて「殉国七士廟」と書いてあつた。広々と静かな敷地の奥に数段高い墓所が設えられ、「殉国七士墓」の墓石が屹立している。東京青山の「石勝」が制作したものだ。裏面には絶筆署名のお名前が彫られている。思



「殉国七士墓」参拝（左から大穂さん、石垣）

わず墓石に手を置いて頭を下げた。私達の他には誰もいない。深々と身に迫るものがあつた。墓誌、墓標を読みながら静かに墓苑を回った。七士のお墓から左へ降りた所に、その後建てられた多くの部隊の慰霊碑が並んでいて、ここにも花が供えられていた。山頂に来るまで穏やかだった空に冷たい風が吹いて、木の葉が一山を巻く様に高く舞った。

石井さんの後を追って車へ戻りながら、大穂さんがしみじみ言う。「今ね、石井さんが言われたの。『戦争はまだ終わっていない』って・・・」

そうなのだ。その通りなのだ。我々は69年前の勝者の判決を日本の戦争の結論として与えられたが、平和条約発効後も、日本人の手で国民が共有できる歴史として戦争の総括をして来なかったのではないか。

今も「侵略戦争」、「戦争犯罪」という漠然とした感想を持つ人は多い。事実と捏造を明らかにして、日本民族の歴史を洗い出したい。それが慰霊の道だと思う。三ヶ根山を訪ねた私たちの同じ思いだった。

悲風背に 七士屹立 三ヶ根山

11月4日

占守島の闘い

その一

岩田 司朗

一 はじめに

昭和20年8月15日、日本は、昭和天皇の玉音放送をもって、ポツダム宣言の受諾を世界に発信し、大東亜戦争の終結を迎えた。

しかしながら、満州、樺太、千島列島の領有を企図するソヴィエト連邦軍は、スターリンの指示のもと、樺太で

の戦闘を継続するとともに、8月17日（18日夜）突如、千島列島最北端の日本領「占守島」（シムシユ島）に侵攻してきた。本記事は、大東亜戦争において、日本領における地上戦が戦われた「沖繩」「硫黄島」「樺太」と共に、日本人と

「土の日」に思う」と併せてお読みいただくことをお勧め致します。

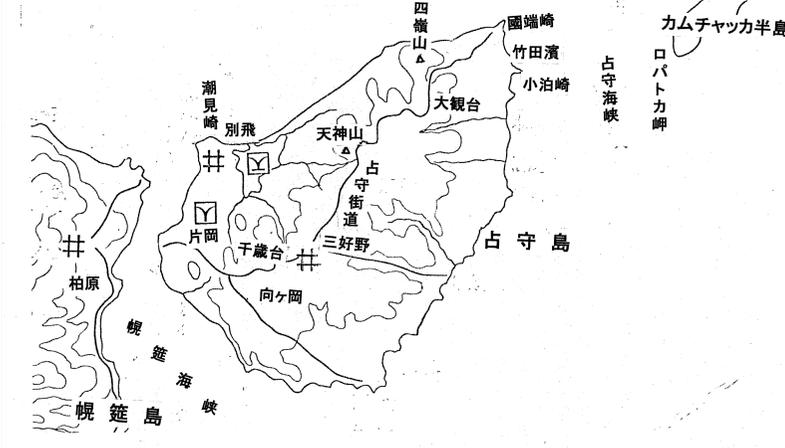
二 占守島の地誌

占守島は、千島列島北東端の島で、北には占守海峡を経てカムチャツカ半島の南端ロパトカ岬まで12km、南には幌筈海峡を経て2kmに幌筈島があり、北海道本島まで直距離1200kmに位置している。

島の大きさは、南北約30km、東西約20km、周囲約100kmの擬宝珠型の小島であり、面積は、琵琶湖の約半分である。全島にわたるかな丘陵が起伏し、最も高いところで、海拔189.9mしかない。

船の停泊できるところは、幌筈海峡部の中程にある南隣の幌筈島の柏原港と南東部の小湾だけであり、当時、軍の艦船は全部柏原港に入

占守島・周辺図



ていた。

三 ソ連優攻前の状況

1 第91師団の状況

北千島の防衛を担任する陸軍第5方面軍(司令官部；札幌、司令官部；樋口季一郎中将)隷下の第91師団(司令官部；柏原、師団長；堤不夾貴中将)の兵力は、独立歩兵10コ大隊(各大隊歩兵4中、歩兵砲1中)、師団速射砲隊、第1砲兵隊、第2砲兵隊、防空隊、戦車連隊、輜重隊その他の後方勤務部隊を合わせ、総兵力約23,000名で、主力をもつて幌筵海峡重点の配備をとっていた。

北千島は、天候、気象、海象の関係上、冬期の上陸作戦は如何に装備優秀な米軍であっても相当の困難が予想される。北千島において作戦適期と考えられるのは、第1期融氷期(5、6月)、第2期露明けの時期(8、9月)の2期間だけであった。

ところが第1期5、6月頃は、師団をあげて配備変更を行っていた時でもあり、胸中戦々恐々たるものがあつた。幸いこの時期を経過して第2期の8月に入ると、既に作戦準備は概成の域に達し、各部隊も綽々とした心境で鋭意作戦準備に邁進する状況となつた。

このような状況のなかで師団はソ連

参戦の報に接したが、かねて覚悟していたことであり、ますます緊張しいよ

2 大詔を拝す

昭和20年8月14日、師団は、方面軍から「15日正午重大放送があるから、各部隊は各部署において洩れなく拝聴せよ」という通達に接した。

重大放送とは何か、民族の命運を託して、督戦激励のお言葉を賜るものと予想していたが、事の余りにも意外に、全員、言葉を失つたかのようなであつた。師団長は、8月17日、大隊長以上の各部隊長等を集め、じ後の行動に関する命令指示と共に「万一、ソ連が上陸する可能性がないでもないが、この場合は戦闘を行わず、じ後の命令指示に従い行動せよ」という指示もした。

この部隊長会同の席上、「対岸ロパトカ岬から砲撃を受く」との報告が國端崎からもたらされ、夕刻まで砲声が続いた。

会同終了後、師団は方面軍から「一切の戦闘行動停止、ただし止むを得ない自衛行動を妨げず、その完全徹底の時期を18日16時とする」という命令に接し、直ちにこれを各部隊に伝達した。各部隊においては、兵器も逐次処分され、信管を外したり、海中投棄やその準備が実施された。遙かカムチャツ

カにあるソ連が、海路わざわざ終戦後の18日、敢えて上陸作戦を行うなど深く考えも及ばなかつたのである。

3 ソ連の千島進攻計画

極東ソ連軍総司令官ワシレフスキー元帥は、8月15日、樺太真岡港上陸に関する訓令と同時に、太平洋艦隊司令官、第2極東方面軍司令官に対し、北部千島列島進攻に関する作戦準備及び実施を指示した。

その命令の要旨は、「先ず占守島及び幌筵島に、次いで温禰古丹島に上陸作戦を行い、8月25日までに千島列島北部諸島を占領せよ」というものであつた。

この占守島上陸計画によれば、「上陸軍は、8月17日夜、占守島北東部に奇襲上陸し、主攻を小泊岬から片岡方面に指向し、18日日没までに片岡海軍根拠地及び全占守島を占領する。」の方針の下、先遣隊は、8月17日2300、國端崎、小泊崎(竹田濱)に上陸し、同地に橋頭堡を占領して主力第1梯団の上陸を援護、主力第1梯団は、17日2400、別命により、敵の抵抗が多い場合には、片岡に進撃する任務をもつて先遣隊の上陸地域に上陸、主力第2梯団は、第1梯団が竹田濱に上陸した場合、片岡に進撃する任務をもつて別飛沼地区に上陸する」という

ものであつた。

なお、進攻部隊の上陸に先立ち、1時間にわたる上陸準備射撃及び飛行師団の爆撃を行うことも計画されていた。

4 上陸進攻兆候に対する判断

8月17日昼頃、小泊崎に座礁しているソ連油槽船に対し、カムチャツカ半島から砲撃が加えられた。

また、「カムチャツカ半島東岸はるか北方に、小型舟艇多数が移動している」との國端監視哨からの報告、同監視哨上空をソ連機3機が通過したのを目撃されているが、師団長、幕僚、現地指揮官は、北千島の将来は米軍と強い関係をもつことがあつても、ソ連とは全く関係ないものと信じていた。

夕刻まで続けられた砲撃に、一部兵員には不安の念を抱く者もあり、師団でも気にはなつたが、格別これということもなく17日の夜に入った。

四 國端崎付近の戦闘

1 ソ連竹田濱に上陸

8月18日0130頃、突然ロパトカ岬のソ連長射程砲からの射撃が開始され、兵士達の夢が破られた。0200頃、村上大隊本部に「海上エンジン音聞ゆ」との至急電が、國端崎監視哨から報告された。

村上大隊長は、直ちに大隊を戦闘配

置につくよう命令するとともに、師団に報告した。國端崎、小泊崎を含む竹田濱に配置されていた中隊は、夜明けとはいえまだ薄暗く、霧が深い中、上陸する敵を発見し応戦を開始した。大隊主力は北部遊撃隊としての既定計画に基づきそれぞれ配置について。大隊長も宿営地を徹して本部及び第3中隊の1個小隊と共に四嶺山洞窟陣地を占領した。

2 水際戦闘の精華

竹田濱に上陸を企図したソ軍に対するわが守備隊の反撃は冒険なものであった。ソ軍の上陸を察知するや國端崎の砲兵、小泊崎の速射砲、大隊砲は、竹田濱の両側から激的な砲火をソ軍に浴びせ、側防砲兵、側防火器としての威力を遺憾なく發揮し、所在の第3中隊もまたこれに協力、撃沈、擱座された船舶は確認しただけでも13隻以上に達し、戦後におけるソ軍将校の述懐と合わせても、水に浸らせられた兵力は、3,000名以上、戦死傷もまた同数を下らないものと推定され、ソ軍の指揮は終日混乱状態となったのである。

わが軍が反撃を途中で中止しなかったならば、上陸したソ軍は水際で殲滅されたであろうことは想像に難くない。特に、國端崎、小泊崎の陣地は、最も堅固に構築された独立性を有する地

下洞窟陣地であり、敵の主上陸地点と予想される竹田濱一帯に対しては、夜間、濃霧時であっても、正確な射撃ができるように施設と訓練が実施されていた。上陸ソ軍第1梯団は、両砲撃からの猛威をじかに受け、これら砲台を撃破するという本来の任務を避け、先遣隊の後を追って島の内陸に向ってしまおうという失態を招いた。このような結果になってしまったのは、当時その指揮官や幕僚部が撃沈された艦上にあったため、海岸に揚がった上陸軍第1梯団が事実上無統制状態に陥ったためとソ軍戦史は述べている。

3 四嶺山の戦闘

北部遊撃隊としての村上大隊の配備は、広正面のため間隙だらけの陣地であり、ソ軍はこの間隙を縫って6時頃には早くも四嶺山に進出し、たちまちこれを包囲した。ここにおいて彼我的近接戦闘が始まったが、村上大隊長以下寡兵よく衆敵を阻止し主力反撃の支撐となったのである。

5 第91師団の反撃

1 第91師団の作戦指導

8月18日未明、全く夢想もしない報告に接した師団長は、とりあえず0210、全兵団に戦闘準備を下令するとともに、0230、戦車第11連隊長池

田末男大佐に対し、工兵隊の一部を併せ指揮し、國端方面に急進しこの敵を撃滅するよう命令した。同時に歩兵第73旅団長杉野少将に対しても、できる限りの兵力を集結しこの敵を撃滅するよう命令した。

戦車連隊は発令1時間後、千歳付付近から発進、占守島北東端付近において激戦を展開した。戦場を覆う霧は戦況の把握を困難にしたが、敵はソ軍であることがようやく判明した。

師団長は攻撃によりソ軍の上陸を阻止するに決し、池田戦車連隊を杉野旅団長の指揮下に入れ、同旅団を速やかに大観台東西の線付近に展開して攻撃に移らせるとともに在幌筵の師団主力の占守島集中を命令した

2 戦車第11連隊の反撃

北千島にあった戦車第11連隊は、6コ戦車中隊、戦車64両からなっていた。連隊は、8月18日、戦車を海に沈める予定であったところ師団の命令に接し、急ぎ出動準備に着手した。

「0320までに三好野飛行場に集結すべし」との命令を受けた各中隊は速やかに整備を終え、同地区に集合、白鉢巻で先頭車上に立ち上がった池田連隊長は、「上陸軍を一人残さず海にたたき落とすまで奮闘せよ」と大声で訓示した後、前進を命じた。

連隊の先頭が四嶺山南麓を流れる豊城川付近に達したところ、ソ軍は既に四嶺山の村上大隊を攻撃中であった。池田連隊長は「戦車第11連隊はこれより直ちに突撃を開始する。祖国の彌榮を祈る」と師団長に対し報告した後、先頭車上から日章旗を大きく振って突撃を命令した。各車は連隊長を中心に展開して、突撃を開始、轟音と砲煙が四嶺山を包んだ。

連隊は四嶺山のソ軍を撃退、さらに稜線を越えてソ軍歩兵部隊を蹂躪した。ソ軍はわが攻撃により竹田濱方向に退却したが、連隊も戦車27両を失い、池田連隊長等が戦死し、中隊長以下の損害も少なくなかった。

連隊は四嶺山南側に集結して再編成を行い、同地付近に布陣した。

(続く)



第5方面軍司令官樋口季一郎中將

事務局からの報告等

一 平成29年度臨時理事会の開催

本協議会会議室において、10月26日(木)に理事会を開催した。

本会議では、事務局からの提出議題等について熱心な討議が交わされ、議案はそれぞれ原案通り承認された。

(一) 議案

○第一号議案：平成29年度上半期職務執行状況(報告)

○第二号議案：平成29年度上半期予算執行状況(報告)

○懇談・報告事項

(1) 協議会の財務状況と今後の課題

ア 基本財産の取崩

イ 協議会の財務状況の分析と今後の課題

(2) 戦没者遺骨収集関係の平成30年度予算概算要求

(二) 出席者

理事10名中9名及び監事1名が出席した。

二 平成29年度第2回慰霊諸団体連絡会議の開催

靖国会館玉垣の間において、12月6日(水)に連絡会議を開催した。

会議では、日本戦没者遺骨収集推

進協会の社員会員の募集、協議会の今後の課題(中長期的視点から)、協議会賛助会員の募集協力について活発な意見交換が行われた。

三 慰霊祭等の参加状況

○市ヶ谷台慰霊祭

9月20日、市ヶ谷駐屯地メモリアルゾーンにおいて偕行社主催の慰霊祭が執り行われ、柚木文夫理事長が参列した。

○66回特攻平和観音年次法要

9月23日、世田谷観音寺・特攻観音堂において執り行われ、圓藤春喜専務理事が参列した。

○靖國神社秋季例大祭

10月18日、靖國神社例大祭に柚木文夫理事長が参拝した。

○千鳥ヶ淵秋季慰霊祭

10月18日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において奉仕会主催の慰霊祭が執り行われ、当協議会から、島村宜伸会長他三名が参列した。

○全国ソロモン会慰霊祭

10月22日、靖國神社において執り行われた同会主催の慰霊祭に、圓藤春喜専務理事他1名が参列した。

○慶應義塾戦没塾員追悼会

11月11日、慶應義塾大学三田キャンパス北館ホールにおいて、慶應義塾戦没塾員追悼会が執り行われ

四 硫黄島遺骨帰還通常派遣事業への参画

圓藤専務理事が参列した。今年度第2回派遣(9月22日~10月3日)に隊友会から推薦された4名が、当協議会からの派遣団員として参加し、遺骨の収容に献身されました。気温セ氏60度以上の高温多湿、狭い洞窟内での収容作業で体力の消耗が著しく、大変御苦労されました。お疲れ様でした。

今後の予定として、1月から2月に第4回派遣が計画されています。

五 新入会員

(平成29年8月1日~11月30日)

【賛助会員】(五十音順)

大西 優 小田 龍平 狩野 隆平

川又 直樹 佐藤 秀幸 中川 吉弘

服部 知己 東田 政尋 眞弓 英之

三浦 直人 吉田 三郎

寄稿のお願い

当協議会は、広報紙「慰霊」を、年4回(1月、4月、7月、10月)発行しています。各団体及び会員の皆様の積極的な寄稿をお願い申し上げます。原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。関連の写真等がありましたら努めて添付をお願いします。

当協議会会員入会の案内

当協議会は、民間有志の会員の皆様からお寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰霊の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰霊事業の永続と充実を希う多くの皆様の、当協議会会員ご加入を心からお待ち申し上げます。

既加入会員の皆様には、お知り合いの方の新規入会勧誘に、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。会員の区分と年会費は、次のとおりです。

一 賛助会員

(本会の趣旨に賛同する個人)

年会費 三〇〇〇円

二 賛助特別会員

(特別御芳志の賛助会員)

年会費 五〇〇〇円

三 正会員

(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)

年会費 一〇〇〇〇円

四 特別会員

(本会の趣旨に賛同する企業・法人団体)

年会費 一口一〇〇〇〇円(一口以上)